

『凍て月』

『凍て月』

上坂京子  
こうなかきようこ

登場人物

加藤芳雄（九〇歳）シベリア抑留者。「抑留者の会」代表。

\*現在は芳雄。抑留時代（一九歳）は芳雄。

加籐俊（三五歳） 芳雄の孫。早くに両親を亡くし、

祖父の元で育つ。派遣社員。

橘容子（三七歳） 居宅介護職員。

北川先生（三五歳） 北山大学教授。企画展責任者。

田中三吉（一九歳）シベリア抑留兵。加藤芳雄と同郷。

菊池幹夫（二七歳）シベリア抑留兵。上等兵。

疋田（三八歳）シベリア抑留兵。兵長。

カーチャ（一七歳）エカチエリーナ・セルゲイブナ。ロ

シア人。

軍服を着た男

兵士

赤ん坊を抱いた女

ターニヤ（四一歳）ロシア人と日本人のクォーター。

大学講師。

男1 ロシア人監視兵。

男2 //

看護婦※

俊子（芳雄の妻）

派遣1 李 食品会社勤務。派遣社員。

派遣2 金 //

派遣3 鄭 //

派遣4 王 //

派遣5 林 //

※時代考証に基づき、看護師ではなく、看護婦と表記。

※なお、食品加工会社内における非正規社員同士の会話に出てくる、「賤民」「エタ」「ヒニン」や「朝鮮人」などの言葉は、日本や朝鮮半島における歴史的事実を踏まえつつ、個人的背景を描くために考慮したものであり、特定の人物、団体、地名等、実在のものとは一切関係ありません。

【背景】

第二次世界大戦末期の一九四五年七月二六日、連合国は日本に降伏を呼びかけるポツダム宣言を発した。しかし、軍や政府はこれを「黙殺」。敗戦を先延ばしにする間に、米軍によって人類史上初原子爆弾が投下され、広島およびその二〇万人、長崎では七万人の命が一瞬にして奪われた。

追い込まれた日本に対し、ソ連は突如宣戦布告。有効だった日ソ中立条約を一方的に破棄し、八月九日、現中国北東部にあたる満州に侵攻した。その激しさは沖縄戦に匹敵すると言われている。一五日の終戦詔勅（しようちよく）後も攻撃は続き、ソ連兵たちは暴行、略奪、強姦を繰り返し、日本人居留者たちを恐怖に陥れた。

さらに、八月二三日、スターリンは五〇万人の日本人をソ連領に強制抑留させる秘密命令を発令した。領土と労働力の獲得を目的としたもので、満州・樺太・千島・北朝鮮など、降伏後、武装解除させられた軍人と一部民間人を終結地を集めて編成し、旧日本軍の組織を利用して管理した。抑留者たちはシベリアや中央アジア、モンゴルなど二〇〇〇カ所以上あるラーゲリと呼ばれる収容所に収監され、苛酷な環境下で強制労働を強いられた。これら違法な抑留の総称を「シベリア抑留」という。

\*

(0)

これは、元シベリア抑留者加藤芳雄の現在と過去、回想あるいは幻想から成る物語である。

真っ白な世界。

吹雪。その音は、死者たちの嘆きに似て。

(字幕) カザフスタン 第三ラーゲリ。気温マイナス28度。

縄を掛けられている男がいる。その名は、菊池幹夫。(以後、菊池)

後方には、兵士たち、赤ん坊を抱いた女、看護婦らが整然と並んでいる。

菊池

死者たちの魂は彷徨う。風に、雪に、無念にまみれて。天と大地の境目は知らぬ間に掻き消され、今となっては臙げに存在するのみ。

現世うつしよと常夜とこよの境目もまたしかり。同士よ、凍てつく地に潰つぶえた者たちよ、未だ曖昧な

この乱世を呆れずに待て。我と共に、見果てぬ夢の行き

つく先をできればそっと見届けてくれ。追って逝く。

いずれまた逢わん、いずれ。

男1、2に連行される菊池。

と、加藤芳雄、(以後、芳雄) 駆け込んでくるなり大声で叫ぶ。

芳雄 菊池さん。菊池さーん。

菊池、立ち止まる。振り返ることなく、

菊池 頼んだぞ、加藤。

男1、2、菊池を小突く。

よろける菊池を急かし、その場を去る。

後方にいた者たちも、静かにその場から消える。

芳雄、茫然としたまま、一人その場に取り残される。

(一)

(字幕) 二〇一五年八月二三日。北山大学「シベリア抑留研究会」企画展会場。室温29度。

中央ブース。収容所(ラーゲリ)を模した造り。

上手に木製台。その上に水筒、スプーン。飯ごうなどの遺留品。舞台中央に置かれたついたてには、兵士が書いた手紙、パネル写真などが、展示されている。

すれ違う人々に交じり、芳雄、車椅子に乗って登場。同行しているのはヘルパーの橘容子(以後、橘)

パネル写真。旧ソ連軍発行の新聞記事。輪になり、手を叩く日本人兵士たちと、赤い靴を履いた一人のロシア人女性。

橘、パネルの前に立つ。

芳雄を呼び止める。

橘 芳雄さん。ほら、「感謝のステップ」ですって。

芳雄、車椅子を動かし、橘の隣へ。

橘、文字を追う。

橘 「医療機関がない村で」か。ラーゲリで手術受けて助

かった人の話みたいですね。悲惨な話ばかりやと思つてましたけど、いい話もあるんですね。そっか、ラーゲリの印象を良くするための、旧ソ連軍の宣伝活動の一環なのかも。

間。

橘 エカチェリーナ・セルゲイブナさん、一七歳？ 日本

橘 だったらまだ高校生。わーっ、大人っぽーい。

芳雄 ……。

橘 ラーゲリって、案外、しつかりした造りなんですね。

芳雄さんがおられた場所もこんな感じでしたか？

芳雄 ……。

橘 芳雄さん？

橘、しゃがみ込み、微笑んで芳雄を見る。

橘 芳雄さん。

芳雄、写真に目を留めたまま、

芳雄 カザフスタン・第三ラゲリ。

橘 え。

芳雄 カーチャ。

靴音が聞こえる。

交差する運命。すれ違っていく人々。

間。

企画展責任者、北川教授の解説が始まる。  
集まる人々。

芳雄、橘もそこに。

北川 一九四五年八月九日、皆さん何の日かわかりますか？  
そう、長崎に原爆が落とされた日ですね。この日、旧ソ連軍は日ソ中立条約を無視し、中国北東部に当たる満州に侵攻しました。

(字幕) 一九四五年八月一日。

満州。とある駐屯地。早朝。気温24度。

各地から部隊が集結。

繰り返される点呼。

馬のヒズメや嘶き。

「天幕を張れ」との声が響き渡る。

芳雄、落ち着かない様子で立っている。

田中三吉(以後、田中)がやってくる。

立ち止まる。

おそろおそろ芳雄に声を掛ける。

田中 なあ、もし、あんた。

芳雄 え。

芳雄、振り向く。

田中 やっぱり芳雄や、わしやわし。

芳雄 三吉やないか、無事やったんか、お前。

田中 ああ、べつちよない。(無事の意) お前は？

芳雄 このとおり。

芳雄、胸を張る。

田中 そうかあ。

手を取り喜び合う二人。

芳雄 ここへはいっ？

田中 夕べ遅くに。お前は？

芳雄 ちよつと前に着いたとこや。あの山越えてな。

芳雄、後方を指さす。

田中 登山か、ええな。

芳雄 険しい岩場ばかりを夜通しやぞ、ええはずないがな。

田中 そうか。

芳雄 お前は？

田中、一瞬言い淀み、

田中 わしか？ まあ、お前と似たようなもんや。

二人、笑う。

芳雄、辺りを見回す。

芳雄 なあ、何や？ 兵隊ばつかり、こないにぎようさん。

田中 帰国や帰国。

芳雄 帰国て、帰れるんか？ もしかして日本に？

田中 呆けたこと言うな。

田中、敬礼しながら。

田中 大日本帝国に帰還や。それ以外どこに帰る場所がある。

芳雄、頭を掻く。

田中 「トウキョウ・ダモイ」や、皆一緒にな。

芳雄 もうか？

田中 もうとは？

芳雄 満州に来て、半年ちよつとしか経ってないのやが。

田中 当たり前。

芳雄 当たり前？

田中 わしも当たった。大当たりや。

芳雄 ……

田中 強運やったってことや。お互いにな。

田中、芳雄の背中を叩く。

二人、笑い合う。

芳雄、笑いやめる。

芳雄 まてよ。なあ、ひよつとしてわしら、

再び北川の解説。

北川 満州在住の関東軍所属の兵士の多くは、八月一五日を過ぎても、戦争が終わったことを知らずにいました。確かめる術もないまま数日が過ぎ、「帰国せよ」との命令が出たことようやく敗戦を悟ったようです。武装解除後、船で帰国すると聞かされた彼らは行軍を続け、途中から貨物列車に乗せられていきました。

(字幕) 一九四五年九月初旬。シベリア・ハバ

ロフスクを出発してから一〇日後。貨物列車。

気温14度。

狭くて暗く、ガタガタとうるさい車内には、便所も、窓さえも装備されていない。

扉の開閉役は、初年兵の芳雄と田中。八月なのに肌寒い空気。

二人に体を支えられながら、用を足すため、尻をつき出してその場にしゃがみ込む、兵長の足田。

足田 いいか。

芳雄 はっ。

田中 はっ。

足田 絶対に離すなよ。

芳雄 はっ。

田中 はっ。

足田、力む。

大きく揺れる列車。

バランスを崩した三人、叫び声を上げる。田中、転倒。足田から離れる。

足田 田中、お前。

田中 はっ。

足田 貴様、わしを殺す気か。

田中 申し訳ございません。

足田 お前もだ、加藤。

芳雄 はっ。

足田 離すなよ。

芳雄 離しません。絶対に離しません。

足田 よし、いいか。

芳雄 はっ。

全員 せーの。

北川の解説。

北川 寒さの中、三〇〇キロの道のりを歩かされた者、少し詰め状態の貨車で輸送された者。軍官民含む約六〇万人の日本人の多くは帰国すると騙されたまま、シベリアや中央アジア、モンゴルにあるラーゲリへと移送されていきました。敗戦のショックと異郷の地での抑留という精神的打撃、厳寒と飢えと重労働による衰弱、チフスや赤痢などの伝染病や作業中の事故により、六万人以上の犠牲者が出たと言われています。

暗転。

(二)

(字幕)二〇一五年八月二四日。食品加工会社。二三時五五分。室温20度。

等間隔で、横二列に並んでいる派遣社員たち。前列には、派遣1・2・3と加藤俊。(以後、俊)後ろの列には派遣4・5が立っている。全員同じタイプの白帽子、白マスク、白衣、白

派遣1

音楽、時間来たねー。うちの仕事じえー

長靴を着用。異物混入を防ぐため、ブルーの手袋をはめている。

全員で盛り付け作業中（動作のみ）

派遣1、横のボウルから食材をつまみ盛り付ける。詰めた容器を派遣2に送る。

派遣2、同じように手を動かし空いた箇所へ食材を詰めた容器を3に送る。

派遣3、受け取った容器に蓋とゴムをして俊に送る。

俊、完成しているかどうかをチェック。

箱詰めしたところで一連の作業は完了となる。

就業を告げる音楽が流れるまで、その作業を繰り返す。

派遣1、上手方向を見、急に盛り付けのスピードをあげる。

派遣2、同じようにスピードをあげる。

容器が溜まり、あたふたする派遣3。

派遣2、溢れた容器をわざとらしく肘で押す。容器が床に散らばる。

派遣3、這いつくばって容器を拾う。

終業を告げる音楽。

作業を止める派遣1・2。

俊 んぶ終わったから、帰るね。

派遣1 お疲れ様です。

派遣2 お疲れ様です。チーフ。

俊 ちよ、李さん、金さん。

派遣1・2、俊を無視して去る。

俊、なすすべなくその場にいる。

後列にいたベテラン派遣社員4・5、呼びもしないのに飛び出してくる。

派遣4 ひやー。

派遣5 ひどいねー、朝鮮人。

派遣3に向け、

派遣4 新人さん、可哀想ねー。

派遣3、何も言わずうつむいている。

俊 あの。

派遣5 何か？

俊、二人に向かって拝むポーズ。

俊 王さん、林さん、ちよっとだけ。

派遣4 残業？

俊 お願いできませんか？

派遣5 今日、駄目ね。  
派遣4 私も、家で息子待ってるね。

派遣4、親指と人差し指で輪つかをつくり、

派遣5 おまけあるか？

俊 え。

派遣5 中国人、何も無い駄目。残業しないね。

俊 もちろんです、残業代ならちゃんど。

派遣4 残業代当たり前。おまけくれ言ってるよ。

俊 余ってるおかずでよければ、好きなのだ。

首を振る派遣4・5。

派遣4 今日、唐揚げない、無理ねー。

派遣5 エビチリでも良かったのに、残念ねー。

派遣4・5 再見。(中国語でさようなら)

派遣4・5、去る。

茫然と立つ俊。

振り返り、派遣3を見る。

俊 いいよ、君も。あと俺やつとくから。

派遣3、俊に向かって頭を下げ、小走りですの場を去る。

俊、溜息。一人残って後片付けを始める。

溶暗。

(三)

(字幕) 一九四五年。カザフスタン 第三ラীগ。初めての冬。午後。気温マイナス28度。

シベリアの冬は分厚い雪で完全に包囲され、朝になっても昼になっても薄暗いまま。

吹雪。

防寒着とは名ばかりの粗末な衣服を身に着けた田中と上等兵菊池。降り続く雪に視界を奪われながら、手分けして芳雄を探している。

田中 おーい。

菊池 おーい。

間。

田中 見つかりましたか？

菊池、首をふる。

菊池 おーい。

田中 おーい。

菊池 加藤。

田中 芳雄。

二人立ち止まる。

菊池 おるか？

田中 おりません。

菊池 くそつ。疋田の奴、吹雪くとわかってて。

田中、周囲を気にし、

田中 兵長殿の耳に入ったら、

菊池 どうでもええ。

田中 上等兵殿。

菊池 飢えと寒さで、この一か月で何人死んだ？ 遅かれ

早かれ、どうせみんなここで死ぬんや。殴られるくらい、  
どうってことないわ。

田中 やけにならんといってください。

菊池 やけやない。

田中 では、何でありますか。

菊池 つべこべ言うな。

田中 ……。

菊池 もっとよう探せ。

菊池、さらに大声で、

菊池 加藤。

雪に足を取られながらも、動きまわる菊池。諦  
め気味の田中、背中を丸め震えながら、

田中 これだけ探しておらんのですから、もう、

菊池 たとえ駄目でも探してやるのが、仲間やる。

田中 ……。

菊池 あの辺りは？

田中 え。

菊池 行くぞ。

菊池、田中の返事を待たず、その場を去る。

しばらくして、

菊池 田中、手えかせ。

田中 え。

芳雄が見つかった。

田中 は、はい。

田中、後を追いつその場を去る。

田中、菊池二人して芳雄を抱え、戻ってくる。

雪を払い、芳雄を転がっていた薪の上に座らせ  
る。

菊池 どや。

田中 はい。(生きてるの意)

菊池 加藤、加藤。

菊池、芳雄を揺さぶり、軽く頬を叩く。

田中 起きろ、芳雄。  
芳雄 うっ。

菊池、田中、二人同時に。

菊池 よっしや。

田中 よかった。

菊池 おい田中、誰か呼んできてくれ。

田中 え。人呼ばなくても、二人でなら連れていけ、

菊池、首を振る。出て来た方向を指さし、

菊池 そこ。

田中 え。

菊池 薪持ったまま、誰か死んどる。

菊池、田中、芳雄を残してその場を去る。

置き去りにされた芳雄を包み込むかのように吹雪が舞う。

薄闇の中、ぼつかりと浮かび上がる村の娘カーチャの姿。赤い靴を履いている。

カーチャ、ゆつくりと芳雄の目の前に出て来る。スカート裾を持ちあげお辞儀した後、ステップを踏んで見せる。  
一回転し、ピタッと動きを止める。

カーチャ ヨシオ。

芳雄 ……。

カーチャ キレイ？

芳雄 え？

カーチャ アシ。

間。

カーチャ ワタシノアシ。

芳雄 ああ。

カーチャ ニツポンジンノオカゲ。

芳雄 手術、成功して良かった。軍医殿がおられたから。

カーチャ ヨシオノオカゲ。

芳雄 私は何も。

芳雄、うつむく。

芳雄 担当者として、その。

カーチャ カナシイ。

芳雄 え？

カーチャ イタイ。

芳雄 足、まだ痛むのか？

カーチャ、もどかしげに、

カーチャ チガウ。

芳雄 え。

カーチャ ワタシ、ココ、イタイ。

芳雄、首を振る。

芳雄 それはできません。ここは元々村人立ち入り禁止の場所。傷が治った以上、留まる理由はない。

カーチャ イヤ。

芳雄 カーチャ。

カーチャ カエリタクナイ。

見つめ合う二人。

カーチャ、芳雄に駆け寄り抱きつく。

芳雄、一瞬受け入れるが、すぐに後ずさりし、カーチャに向かって敬礼する。

カーチャ ヨシオ、キテ。カナラズ、キテ。

芳雄 カーチャ。

カーチャ ガイシュツキョカトレタラ、ワタシノオウチニキテ、カナラズ。

カーチャ、去る。

(四)

(字幕)二〇一五年八月二五日。加藤家。八時。室温29度。

下手に、ベッド、小ぶりの収納棚。シベリア抑留についての資料、電話、パソコン、稼働式トイレ。トイレ。

芳雄、持病悪化のため体調に波あり。ここ数日は室内でも車椅子を使用している。

ベッドに横たわる芳雄。また同じ夢を見た。彷徨う思考。過去と現実の境界線を行きつ戻りつしながら寝返りを打つ。

猛暑日。暑すぎるせいか、控えめに感じる蝉の声。

と、玄関先で鍵を開ける音。

ヘルパーの橘、合鍵を使って部屋の中へ。エプロンを身に着け、カーテンを開ける。

芳雄 (眩しそうに) うつ。

橘 芳雄さん。朝ですよ。

芳雄 ああ、橘さん。

橘 おはようございます。

芳雄 おはようございます。

橘 眠れました？

芳雄 さあな。眠ったような、眠らんかったような。

橘 ご気分は？

芳雄 悪うないです。

橘 良かった。すぐに朝ごはん作りますからね。

芳雄 その前に、

橘 え。

芳雄 し、しょんべん。

橘 あ、はい。

橘、車椅子の用意をする。芳雄の身体を起こし、ベッドの淵に座らせる。

橘 芳雄さん、立てます？

芳雄 さあ、どやろ？

橘 しつかり捕まってくださいよ。

芳雄 はい。

橘 せーの。

芳雄、橘の手を借り、車いすに移乗。

橘 できた。

芳雄 も、漏れそう。

橘 は、漏らしたらあきません。もうちょっとだけ栓しといて。

芳雄 栓って、橘さん。

芳雄、笑う。

橘もつられて笑う。

芳雄 あかん、笑ったらちよびつと漏れてもた。(冗談)

橘 え。ち、ちよつと待って。

芳雄 待たれへん。(冗談)

橘 待ってー。

橘、車椅子を押し、大急ぎで芳雄をトイレに連れて行く。

間。

水を流す音。

橘・芳雄 はーつ。間に合った。

芳雄 お蔭で、スツキリ。

橘 じゃ、朝食、作ってきますね。

芳雄 お願ひします。

橘 芳雄さんは？

芳雄 え。

橘 ベッドに戻るか、このままか。

芳雄 じゃ、このままで。

橘 わかりました。

橘、去る。

芳雄、自分で車椅子を動かし、収納棚から抑留者の会の記録ノートを取り出し、拾い読みする。

間。

橘、朝食を運ぶ。

橘 お待たせしました。

芳雄 おおきに。

橘 芳雄さん、和食好きですよね。

芳雄 贅沢言うつもりはないんですが、パンはちよつと。

橘 え。

芳雄、手にしたノートを叩きながら、

芳雄 ラーグリで嫌いいうほど食うたから。  
橘 ああ。

芳雄、朝食を食べ始める。  
俊、深夜勤務を終えコンビニの袋を持って帰宅。

俊 ただいま。

芳雄 おかえり。

橘 おかえりなさい。俊さん。

俊 (橘に) ご苦労さんです。

橘 いえ。

俊 俺も一緒に食べよかな。

芳雄 俊、橘さんに世話かけるなよ。

俊 わかってる。

俊、コンビニの袋からメロンパンと野菜ジュースを取り出し、テーブル上の空いたスペースに並べる。

芳雄、顔をしかめ。

芳雄 何や。

俊 見てわからん？ メロンパンやん。

芳雄 メロン。

俊 美味しいで、外はサククリ、中はふわふわ。

芳雄 ふわふわ？

俊 食べてみる？

芳雄 いらん。

俊 そんなこと言わんと。このコンビニのは二種類のクリームが入っててなかなか、

俊、手にしたメロンパンをちぎり、芳雄に渡す。  
芳雄、顔をしかめたままパンを口に入れ、

芳雄 ん。

俊 ん？

芳雄 っつて、ここはシベリアか。

俊 は？ 収容所で食べたクソまずい黒パンと一緒にせんでや。

芳雄 パンはいらん。わしは橘さんが作ってくれたもんを食べる。

俊 そうですか。

間。

俊 どれどれ、ちよつと味見。

俊、芳雄の卵焼きをばくつと一口。

芳雄 ああ。

俊 パンあげたやろ、交換やん。

芳雄 交換要求した覚えはない。

俊 要求つて。

橘、たしなめるように。

橘 俊さん。

俊 (橘に) はいはい。

橘 もう。

俊 (芳雄に) ムキにならんでや、じいちゃん。大人げないで。

芳雄 お前こそ、人のぼっかり欲しがらな。

俊 何のこと？

芳雄 (俊に) もう、ええわ。(橘に) お茶淹れてくれますか。よかつたら、橘さんのも。

橘 いえ。

芳雄 遠慮せんと。

橘 規則ですから。規則破つたら、もうここへは来られませんから。

俊 相変わらず、きまじめやなあ、橘さんは。

橘、俊の言葉に反応せず。

橘 食後のお菓も、用意してきますね。

橘、去る。

芳雄 どうや、仕事は？

俊 まあ、ぼちぼち。

芳雄 ヒマなんか？

俊 いや。

芳雄 忙しいんか？

俊 いいや。

芳雄 どっちか、わからんがな。

俊 ぼちぼちや言うてるやん。

芳雄 今、何してる？

俊 じいちゃんと喋ってる。

芳雄 (じれて) 何の仕事してるんかって話や。

俊 ライン。

芳雄 ライン？

俊 食品の盛り付けやら検品。ザーツと運ばれてくるやつ。

芳雄 そうか。ええな。

俊 そうかな？

芳雄 ああ、ええ仕事や。

俊 めっちゃ目疲れるけどな。

芳雄 食べ物の仕事やろ、ええがな。

俊 え。

芳雄 そうやろ？

俊 そうかな。

芳雄 しんどいんか？

俊 しんどいよ、そりや。

芳雄 頑張れよ。

俊 ぜんぜん感情こもってないやん。

芳雄 そんなもんやろ、仕事やねんから。

俊 まあ、そうやねんけどさあ。

芳雄 とにかく真面目にな、頑張つたらええ。

俊 じいちゃんも、頑張つて。

芳雄 お前に言われたない。

俊 何それ、人がせつかく。

橘、盆を手に戻る。

橘 お待たせしました。

橘、テーブルに湯呑と薬と水を置く。

芳雄 すんませんなあ。

橘 何話してはったんです？

芳雄 そうですなあ。日本の労働問題について、ちよつと。

俊 はあ？

芳雄 派遣社員、いや、非正規雇用者の実態。

俊 それを言うならワーキングプアのやろ。

芳雄 ああ悲し、低賃金労働者。

俊 働けど、働けど……か。俺、住民税とか払ってないし。

芳雄 市町村民税非課税者、わしもそうや。

俊 じいちゃんは、ええやん。九〇近くになつてまで払う

必要ないわ。

芳雄 そうか。

俊 俺、三三歳やで、生涯賃金とか考えたらやつてられへ

ん。正規（雇用）との差があり過ぎて。俺の人生、これ

からも低空飛行なんやな、とか。こんなんで結婚できる

んかなとか。

芳雄 相手おらんのやし、良かったやないか。

俊 よーないわ。

芳雄 仕事あるだけ、有難いのと違うか。

俊 そうやけど。って、じいちゃん、この話オチあんの？

芳雄 ない。断固としてない。

俊 やと思った。どうせ暇つぶしやろ。

芳雄 まあなあ。どこ吹く風、ケセラセラや。

橘 何か、楽しそうですね。  
俊 どこが？

橘、時計を気にしだす。

橘 食べ終わったら。早めに支度していただかないと。

芳雄 え。

橘 ほら、お客さん。シベリアのことでロシアからわざわざ。

芳雄 そうか。今日やったか。

橘 そうですよ。抑留者について調べたいってロシアから

わざわざ。

俊 何で二回？

芳雄 別嬪さんがやって来る。

俊 あかんで、じいちゃん。その発言、セクハラやから。

芳雄 褒めて何が悪い。なあ、橘さん。

橘 え。

俊 容姿について言うこと自体が問題やねんで。なあ、橘

さん。

橘 ええ、まあ。

俊 誰？ 何なん、その人。

芳雄 ロシアの何ちゃら大学の先生。

橘 あちらで、抑留者のことを研究してはるみたいで。

俊 へーっ。そんな人が何でうちに？

橘、自慢げに、

橘 そりゃ、「抑留者の会」の代表ですもん。芳雄さんは。

芳雄 大学の「抑留研究会」の企画展に招待してもらって。  
橘 そこで偶然、知り合いの方が載ってる新聞記事見つけたんですよねー。芳雄さん。

俊 へえー。

芳雄 責任者に記事のこと尋ねたら、ロシアで抑留の研究してる先生がおるから、聞いてみたる言うてくれてな。

俊 ふーん。

橘、はずんだ様子で、

橘 もう、びっくり。いきなり掛かってきたんですもん。

国際電話。

俊 へえ、何て？

橘 スンマセン。ワタシ、ターニヤトモウシマス、シベリアヨクリユウのケンキュウシテオリマスネンケド、ソチラニオジヤマシテモヨロシデツカ？つて。

俊 めっちゃ、カタコト。微妙に関西弁まじってるし。

橘 すみません。調子に乗ってしまいました。上手にしゃべってはりましたよ、日本語。

俊 何や。

橘 すみません。

俊 ロシアからかあ。凄いな、何か。ね。

電話が鳴る。

橘、電話に出る。

橘 はい、加藤でございます。いいえ。はい、はい、わか

りました。少々お待ちください。

橘、受話器を手で抑えて振り向き、芳雄を見る。

芳雄 誰？

橘 研究会の、北川先生。

俊 何や、ターニヤさんやないん。

芳雄、俊を睨む。

橘、受話器を押さえ、小声で。

橘 どうしましょう？

芳雄 橘さん、代わりに聞いてくれますか？

橘、頷く。

橘 お待たせしました。はい、はい……。ええ、はい。え、

延期？ それで、ターニヤさんの具合は……。はい、はい。お大事にとお伝えください。

溶暗。

(五)

(字幕) 二〇一五年九月同日。加藤家。夕暮れ時。室温27度。

どこかでヒグラシが鳴いている。溶明。芳雄、

眼鏡を掛け、抑留当時を振り返りながらパソコンで手記を書いている。覚え書きノート数冊と赤ペン。飲み残しのコーヒーが入ったマグカップ。

軍服を着た男（軍服男）がいる。

椅子に腰かけ、手には名簿のようなものを持っている。

芳雄、男のことを思い浮かべながら、キーボードを打つ。

軍服男 「加藤芳雄。昭和一九年より第四六部隊に所属」

で間違いないか？

芳雄 はっ。

軍服男 年は？

芳雄 二〇歳であります。

軍服男 二〇歳未満で召集か？

芳雄 はっ。一九歳になってすぐであります。

軍服男 入営後は？

芳雄 満州に渡りまして、憲兵に志願しました。憲兵教育隊にて、武道や射撃、刑法、陸軍刑法や、倫理学や心理学を学びました。あとはロシア語を少々。

軍服男 話せるのか？

芳雄 いえ、あの、

軍服男 はっきり言え。

芳雄 はい。

軍服男 よし、加藤、お前に通訳としての任を与える。

芳雄 ……。

軍服男 近くの村からロシアの娘が運び込まれた。直ちに

軍医殿の所へ行け。

芳雄 はっ。

芳雄、敬礼する。

歩く。

立ち止まって、独り言。

芳雄 あー。

芳雄、しゃがみこんで、頭を抱える。

芳雄 中国語習うよりはいいか程度の軽い気持ちでかじつ

ただけやのに。

と、ふいに田中が顔を出す。

両手に二つ飯ごうを持っている。

田中 ほれ、晩飯。

芳雄、田中から飯ごうを受け取る。  
続いて、兵士たち、ぞろぞろと飯ごう片手に集  
まってくる。  
きつい作業を終え、疲れ切った表情。

芳雄 すまん。  
田中 いや。

芳雄、田中、地べたに座り胡坐をかく。  
二人、軍服のポケットから自分の匙を出し、ち  
びりちびりと粥をすすする。

田中 どうやった。  
芳雄 通訳せいで。

田中、大袈裟に驚き。

田中 通訳？ ロシア語の？ お前とことん当たりやな。  
芳雄 どこが。  
田中 通訳やったら、腹減らんやろ。  
芳雄 減るわ。

田中、ツルハシを振り下ろす真似をする。

田中 土木やるよりマシやろが。

と、菊池、怪我した兵士を支えながらやってくる。

菊池 そうやぞ、加藤。一時でも肉体労働から解放される  
んや、贅沢言うな。  
芳雄 上等兵殿、そんなつもりは。

菊池、兵士を座らせる。  
皆の視線が二人に集まる。  
芳雄、立ち上がる。

芳雄 自分が。  
菊池 気にするな。

田中、残りの粥を一気にすすする。

菊池 田中、毎日毎日、こんな水粥、物足らんな。

田中 はい、足りません。

芳雄 慎め、三吉。失礼やぞ。

菊池 (芳雄に) かまわん(田中に) キツイか、ここは。

田中 はい。

兵士 はい。

田中 腹が減って、減って。

菊池 食べたばかりやのに、もうか。

田中 申し訳ございません。

菊池、大きく笑う。

菊池 食い意地張るんは、若い証拠や。

田中 あの。

菊池 どうした。

田中 妙な噂を耳にしました。

菊池 噂？

田中 食料分配について、その。

菊池 どうした、言ってみろ。

間。

田中 上前撥ねてる人間がおるんであります。  
菊池 足田兵長のことか。

田中、驚く。

田中 ご存じだったのですか。

菊池 ああ。

兵士 上等兵殿、その名前は、ここでは。

菊池 うむ。不用意な発言は慎まんな。

芳雄 三吉、どういうことや？

田中 何人かで結託して初年兵の食料削って、自分らの取り分に回しとるんや。

芳雄 ほんまか、それ。

田中 ああ、厨房担当の奴から直に仕入れた話や、間違いない。

菊池 本来ならば、目下の者を庇わなあかん立場の人間が、我先にとがめついことしよって。それだけやない。自分の作業を押し付けては、出来ん奴や、逆らった奴に制裁を加える。これ以上、あいつらのことを見過ごすわけにはいかん。

田中 どうされるおつもりですか？

菊池 直訴する。信頼できる筋にな。

田中 お供させてください。

菊池 いや、田中。この話、一旦俺に預らせてくれ。機を見て動かにならん。その前にしつかり証拠を固めておかんと。

田中 はっ。  
菊池 気をつけろよ。今、もしあいつらに情報掴んでるこ

とが知られたら、ここにいる者全員潰れるやもしれん。皆にも頼む。俺に時間と力を貸してくれ。

菊池、皆に向かって頭を下げる。

芳雄・田中 上等兵殿。  
兵士 上等兵殿。

菊池の言葉に奮い立つ芳雄、田中、兵士たち。

芳雄 虐げられてばかりの我ら初年兵にとって、菊池さんは憧れの存在やった。

芳雄、溜息。マグカップを手に取りコーヒーを一口すする。赤ペンを持ち、強調したい箇所を印をつけ、再びキーボードを打つ。出来上がった原稿を口に出して、読んでみる。

芳雄 証拠はあるものの、菊池さんはなかなかすぐには動かなかった。じれったい気持ちと、諦めの気持ちを抱えたまま、我々初年兵はただひたすらに耐えた。入ソ一年目の冬で、二〇〇〇人のうちの約半数が死んだ。そんな

現状を見て私は仲間のために出来る限りのことをしたいと思ひ、馴染みのソ連軍監視員に、「今後、食料確保が出来なければ、作業効率は下がっていくだろう」との見解を繰り返して伝えた。生き残るためにはとにかく何か食わねばならなかった。春になってからは食べられそうなものなら何でも口にしたら。タンポポ、カエル、蛇、昆虫の類にまで手を伸ばす雑食ぶりだった。やがて奇妙なことが起こり始めた。異常な行動をする者が続出したのだ。所かまわず放尿したり、夢遊病者のように夜中に舍内を彷徨ったりで、舍内騒然となった。

田中、突然、堪えきれないといった様子で爆笑。

田中 あー、おもしろ。こないな展開になるやなんて。

芳雄 原因は……確か、アザミ。

田中 アザミやのうてアザミによう似た草の根っこな、疋

田兵長、食い意地張りよって、あれ食うてついにぼっくりイカレコロ。

疋田 おえ。

疋田、吐いたかと思えば、床に寝転びのた打ちまわる。睨む。奇声をあげながら放尿する。田中、擲擻うように、近づいたり、離れたりしながら飽きもせずその様子を眺めている。

芳雄 今の言葉でいえば「脱法ハーブ」あれみたいなものやっただと思う。吐いたり、下したり、泡噴いたか思ったら、物の怪に憑りつかれたかのような形相でこっちをじつと睨みよる。おや？ と気づいた時にはもう手遅れで、そうならもう、自然に毒が抜けるのを待つよりほか手立てがのうて。二、三日で快復する奴。狂ったまま元に戻らなかった奴。どうなるかはすべて本人の体力次第、運次第。

芳雄、椅子の上で胡坐をかく。  
傍らに兵士、すつと寄ってきて芳雄の背後に立つ。  
つ。

芳雄 「飢えれば死ぬ。飢えを凌ぐために口にすれば、食当たり、毒当たり。場合によっては死に至る。その確率は、ロシアンルーレット並み」と。

兵士たち、芳雄の背後から前に移動。  
芳雄、考え事をしながら兵士たちが立つ方向を見る。手を止め、座ったまま伸びをする。  
再び入力作業をしかけて、手を止める。

芳雄  
けど、

間。

芳雄 結局、疋田は死ななかつた。

間。

芳雄 極寒、飢餓、苛酷な労働、それ以外にもわしらの命を脅かすものがいた。ラーゲリの柱などに湧く大量の南京虫やシラミ、奴らは夏も冬も関係なく生息する。嘔まれると腫れあがり、熱が出たり、半年以上もかゆみが続く。やられた者は睡眠不足が続き、やがてどんどん衰弱していった。

芳雄、無意識にぼりぼりと身体を搔く。

芳雄 疋田という男の性質は、それと似たようなものやっただ。シラミや南京虫並みのしぶとさで復活したとたん、三吉に的を絞り執拗に虐め出した。

間。

芳雄 やがて、三吉の身にさらなる不運が押し寄せてきた。

田中。

兵士たち、静かにその場を去る。  
暗転。

田中 すみません。これだけは勘弁してください。父の形なんです。お願いします。

(六)

(字幕) 一九四六年暮れ。カザフスタン 第三  
ラーゲリ。夕方。気温マイナス25度。

男1、田中に向かって、「ダワイ」という言葉を繰り返す。

菊池 くそつ。

芳雄 「ダワイ、ダワイ」で。

間。

男1、サンングラスを掛け、胸ポケットに数本、万年筆を刺し、両腕にジャラジャラと数個の腕時計をはめ得意げにしている。見回りの合間に誰彼となく絡んでは、捕虜たちの私物を巻き上げてている。

一日の作業を終え戻ってきたばかりの芳雄と菊池。収容所入口付近で男1に絡まれている田中を見かける。

田中 頼みます。これだけは、これだけは。

男1、じれた様子で小銃を取り出し、田中に銃口を向ける。

芳雄 (小声で) またですね。  
菊池 ああ。

芳雄 三吉。

男1、田中に向かって人差し指をクイッククイッと動かし、腕時計を要求する。何度も首を振る

男1、興奮した様子で田中の肩を強く突く。  
田中、よろめき、跪かされる。  
その様子を見詰める芳雄と菊池。

菊池 ちくしょう。ロスケめ。

芳雄、前に出ようとする菊池を制止する。

芳雄 お待ちください。菊池さんまであないな目に。  
菊池 加藤。負けた国の人間は何されても黙つたらんとあ  
かんのか？ こんな屈辱を味わうくらいなら、いつそ、

男1、ニタニタと笑いながら田中に向かって威  
嚇射撃。

菊池 やめろ。

菊池、田中を庇うようにして、前へ出る。

男1、慌てて菊池に銃口を向ける。

揉みあう二人。

田中、その隙にその場から逃れる。

芳雄 菊池さん。

と、男2登場。サングラス姿。胸ポケットには

沢山の眼鏡。カチューシャのようにして頭にも  
眼鏡を引っかけている。  
天井に向け空砲を一発。菊池に銃を突きつけ、  
動きを封じる。

田中 菊池さん。

菊池、動けない。  
男1、2、菊池の顔や腹を思い切り殴る、蹴る。  
殴る。

菊池 うっ。うーっ。(うめき声)

菊池、地面に押し倒される。後ろ手に縛られ、  
別室に連行される。

芳雄 菊池さん。  
田中 菊池さん。

茫然とする田中、芳雄。

芳雄 大丈夫か。

田中 どうしよう、芳雄。わしのせいで、わしのせいで。

田中、その場にへたり込む。

芳雄 立て、三吉。菊池さんは、こんなことで死ぬお人や  
ない。

芳雄、田中を引つ張り上げる。

芳雄 行くぞ。三吉。  
田中 ああ。

芳雄、田中その場を去る。

(七)

(字幕)二〇一五年九月一二日。食品加工会社。  
夜。室温20度。

クリーンルームから一人ずつ出て来た派遣社員。前列下手から横一列。派遣3・1・2の順で並ぶ。

俊は最後尾。

後列には派遣社員4・5が並ぶ。

作業開始を告げる音楽。

皆でいっせいに盛り付け作業。(動作のみ)

新人の派遣3も慣れた手つきでテキパキと動いている。

派遣1 ちよつと。

派遣1、送られて来た容器を3に戻し、指さしながら食材の量が少ないと指摘。

派遣3、首を傾げつつも、言われるままにおかずを足す。

派遣1、パンパンに詰められた容器を、派遣2に送る。

派遣2、普通に詰めて俊へ回す。

俊、均一でない容器をラインから除く。

やり直しの容器が溜まりだし、収拾つかなくなる。

俊、笛を吹いて前列の作業を止める。

派遣1、派遣3に食ってかかる。

派遣1 ちよ、あんた。何でこんなことぐらい出来ない？

派遣3 ……。

派遣1 こんなに詰め込んで。

派遣3 私、ちゃんとやりました。

派遣1 やってないから、こうなったよ。

派遣3 あなたが、もっと入れるって言うから。

派遣1 先輩に向かって何？ そんなこと言っていないよ、

私。

派遣3 指図したでしょ。

派遣1 してない。

派遣3 こうやって、

派遣3、1の動きを真似る。

周囲の人間を見回し、

派遣3 他の人も見ていたはずですよ。

俊、二人の元に駆け寄る。

俊 どうしました？

派遣3 私、ちゃんと入れました。それなのに、突き返されたんです。この人に。

そっぽを向く、派遣1。

俊 本当ですか？ 李さん。  
派遣1 さあ。

後列にいた派遣4・5。勝手に作業を止め、駆け寄ってくる。

俊 ああ、王さん、林さん、勝手に作業止めちゃ駄目。

派遣4 見たよ、私。見た、見た。

派遣5 林さんも、見たね。この人いつもいつも意地悪ばかりかし。

派遣1 うるさい、中国人口出しするな。

派遣4 何言うか、朝鮮人。私たちの方が先輩。なのに何でそんな偉そうにする？

俊 ち、ちよつと待って。皆さんどうしちゃったんですか、変ですよ。

派遣4 チーフこそ変。こんなこと言われて、どうやって落ち着けるか？

派遣5 もう私、頭ん中クシャクシャね。中国人売られた喧嘩かう。1時間でも2時間でも、いつまでもも続けてられるね。

睨み合い、罵り合う派遣1、2、4、5。  
その様子を見ていた派遣3、吐き捨てるように言い放つ。

派遣3 あーあ。

一同、派遣3を見る。

派遣3 どいつもこいつも賤民ばっか。

派遣2 せん？

派遣3 「エタ」とか「ヒニン」とか。

俊 ちよつと、金さん。何を。

派遣3 私、知ってる。留学してきてすぐ日本の歴史学んだから。

俊 そんなことまで知ってるなんて、凄いですね。けど、それは近代前の歴史上で作為的に作り出されたものであってですね、その、

皆の視線が俊に集まる。

俊 知っているからって、簡単に使っている言葉やないから。

派遣4 使っている言葉、使っている言葉？ チーフ、どういう意味か？

俊 ……。

派遣4 日本人、すぐそうやって黙る。悪い癖ね、言わないと誰も何もわからない。仲良くなれない。

俊 仲良く？

派遣5 そう。私たち、喧嘩する。仲良くなるため。

派遣4、派遣1と3を指さす。

派遣4 でも、あの朝鮮人とこの朝鮮人は違う。意地悪するのただけの喧嘩ね。私たちとぜんぜん違う、私たちは意味わからない。

派遣3 確かに。ずいぶん違うわ。あんたたちと、私とは。

派遣3、俊に向かって、微笑む。

派遣3 チーフ。

俊 はい。

派遣3 私、辞めます。

俊 辞める？

派遣3 辞めさせてください、今、この場で。

俊 そんなこと急に言われても、上の人に相談しないと。

派遣3 今までのお給料は足りないんで。フィールドワークの勉強のつもりでここに来たけど、こんな状態では、何の学びにもなりませんし。

俊 ……。

派遣3 これ以上、憂さ晴らしの対象にされるのは、ちょっと、大手企業から内定貰ってますし、ウチの実家金持ちなんでわざわざこんな場所で働かなくても、

派遣3、皆に向かって一礼。

派遣3 というわけで、短い間でしたが、

派遣3、帽子を脱ぐ。

派遣3 こんな場所、

間。

派遣3 二度と来るか。

派遣3、言うと同時に手にした帽子を床に叩きつけ、走り去る。  
一同、派遣3に向かって口々に叫ぶ。  
俊、他の派遣社員に向かって、

俊 一旦休憩。僕が戻るまで皆さん、そのまま、そのまま。  
で。

間。

俊 鄭さん、鄭さん。

俊、派遣3を追いかける。  
ざわつく派遣社員たち。

暗転。

(八)

(字幕)二〇一五年九月二〇日。加藤家。夕方。  
室温24度。

あぐらをかく芳雄と俊。芳雄の横には俊子が、足を崩して座っているが、俊には見えていない。三人の目の前にはコンビニの袋。中には缶ビール。

芳雄 社内規定違反？

俊 そう。

俊子 どうして、そんな？

芳雄 鄭さんって人を追いかけただけやのに？

俊 職場放棄した人と同じことやって言われた。

芳雄 心配するやろ、普通。事故でもあったら大変やし、会社かて困ることやろに。

俊 辞める言うて出て行ったんやから会社の責任にはならんて。

俊子 まあ。

芳雄 殺生な話やな。

俊 ライン勝手に止めたこと自体が問題なんやって。鄭さん見失って、諦めてすぐ戻ったけど、もうちよい遅かったら、損害賠償請求してたかもって。

芳雄 首切られるだけで済んで良かったと思えてか？  
俊 そう。

芳雄 そこにいた人たちは？

俊 王さんと林さんが、泣きながら見送ってくれた。

芳雄 へえ、そんなに慕われとったんか。

俊 頼りないところあったけど、気楽で良かったって。

俊子・芳雄 何やそれ。

俊 さあ、俺にはさつぱり。他所の国の人らの考える事は。

芳雄 他所の国の人やない、女心に疎いって話やろ。

俊 そうかもな。でも、そうやとしたら遺伝やで。

芳雄、袋から缶ビールを取り出し、俊に渡す。

俊子 俊の言う通り。

芳雄、苦い顔。俊子に向け、缶ビールを持ちあげ口をつける。

俊 じいちゃん、俺またプーや。

芳雄 まあ、今日はばあちゃんの命日や。生きていけば先のことほどないにでもなる。あれこれ考えんと、供養や思ってお前も呑め。  
俊 うん。

俊、缶ビールを一口。

俊 うわ、ぬるつ。

(時間経過)

芳雄と俊、上機嫌で笑っている。

芳雄 よし、今日は特別に、

俊 特別？

芳雄 お前に恥ずかしい話をしてやる。

俊 じいちゃんがエロ話？ 珍し。てか、初めてとちやう？

芳雄 終戦直後の話や。

俊 終戦直後って満州の？

芳雄 満州の駐屯地。

俊 へえ、満州のエロ話かあ。

芳雄、俊の言葉に応えず、

芳雄 満州の駐屯地で、ある人間を思いっきりどついた。

俊 は、どついた？ 誰を？

芳雄 同じ部隊にいた中国人。

俊 何で。

芳雄 「日本軍が負けた」って、大声で言いよった。

俊 ……。

芳雄 言われた瞬間、頭にカーツと血が上って、気がついた時にはそいつをぼこぼこに。

俊 何でまた。

芳雄 得意げに見えたんや。いい気味や言われてるみたいで、腹立って、腹立って、自分の気持ちを抑えることが出来なかった。

俊 けど、ホンマのことやん。

芳雄 ああ、何一つ間違ってたなかった。

間。

芳雄 あんなことしてもうて、いつ何時報復されるかわからん思ったら怖わあて、怖わあて。二度とそいつに近づけんかった。

俊 なるほど。

間。

芳雄、頷く。

芳雄 わかるか？

俊 さあ。

芳雄、俊を軽く小突く。

芳雄 間違えるなよ言うこつちや、わしみたいに。

俊 何で今？

芳雄 さあな。

俊 じいちゃん。

芳雄 おう。

俊 一応、わかった。

芳雄、笑う。

俊 思ってた話とぜんぜん違うかったけどな。

俊子、下手に消える。

芳雄 以上。  
俊 え、そんだけ？

入れ替わるようにしてカーチャが来る。

当たりを見回し、隠れながら近づく。  
芳雄の手を取り強く引く。

よろける芳雄。  
カーチャの姿は俊には見えない。

俊 あーあー、じいちゃん、大丈夫かいな。

芳雄 ちよつと呑み過ぎた。

カーチャ キテ、ヨシオ。ワタシノトコロニ、ハヤク。

芳雄、カーチャに支えられながら、立ち上がる。  
ベッドに腰掛ける。

俊 寝る？

芳雄 そうやな。

俊 じゃ、残りは俺が片づけとくから。

芳雄 お前も、早めにな。

俊、無言のままビニール袋を持った手を挙げその場を去る。

芳雄、俊に向かって手を挙げる。

カーチャ、芳雄の首にしがみつく。

芳雄、俊子が去った方向を気にしながら、

芳雄 すまん。

カーチャ ヨシオ。

芳雄、カーチャを抱きしめる。

芳雄

カーチャ。

暗転。

(九)

吹雪の音。

(字幕)一九四七年二月。第三ラージ。夕刻。  
気温マイナス27度。

再び土木作業班に戻った芳雄。苛酷な作業を終え、やれやれという顔。体調を崩し、収容所内の病室に運ばれた田中を見舞う。

菊池の一件以来、心身共に衰弱している田中はベッドの上。身を縮め、胎児のような格好で眠っている。

芳雄 来たでえ。

田中、目を覚ます。

田中 ああ、芳雄。

芳雄 どや、腹の具合は。

田中 あかん。変わらん。

芳雄 ピーピーか。

田中 ああ。

芳雄 痛むんか。

田中 ああ。

芳雄 どこが？

田中 どこもかしこも。

芳雄 あかんなあ。そりや。

田中 腹も、ケツの穴も。胸も、心もぜんぶ。痛うて、痛うて、泣けてくる。

芳雄 泣くな。三吉。しっかりせえ。

田中 罰や。

芳雄 え。

田中 罰が当たった。

芳雄 菊池さんのこと、言うてるんか？

田中、黙り込む。

芳雄 あの人がお前を裁くとしても？

田中 そんなことは、言うてない。

芳雄 じゃあ、何や？

田中 別に。

芳雄 何回も言わすな。菊池さんは死んでない。別の収容に連れていかれただけや。悪いのはロスケ。お前が気にすることやない。

田中 でも。きっかけつくったんは、わしやから。

芳雄 三吉。

田中 わしのせいや。

芳雄 やめとけ。自分で自分を追い込むようなこと。

田中 違う。違うんや。

芳雄 何が？

田中 見たやろ。

芳雄 ……。

田中 聞いたやろ。

芳雄 だから、何をや。

田中 終戦直後の満州で何が起きたか。

間。

田中 あの村。

芳雄 住民が助けを求めに来たっていう村のことか。

田中 ……。

芳雄 全滅やったそうやな。

田中 ああ。

芳雄 行軍途中でか？

田中 ああ。

芳雄 わしの部隊は、人と出会わんような険しい道しか行

田中 かんかったから。

田中 そう言うとな。

田中、心ここにあらずという表情。

芳雄 お前は？

田中 え。

芳雄 見たんか？

田中 見た。

芳雄 何を？

田中 地獄。

芳雄 地獄で。

田中 逃げまどう村人、追い回すソ連軍。

芳雄 ……。

田中 村に残ったんは、女、年寄り、子供だけ。抵抗できる人間がおらんとところに、奴らがどつと押し寄せてきよった。なすすべなしや。

間。

田中 芳雄。

芳雄 え。

田中 お前、女の裸見たことあるか。

芳雄 何や、藪から棒に。

田中 いや。

うつむく、田中。

芳雄、わざと冗談めかし、

芳雄 こんな僻地に来てまで、色ボケか。

田中 違うわ。偵察係やったんや。わしは。

芳雄 ……。

田中 双眼鏡持って、隠れもって近づいた。

芳雄 で、何を？

田中 道端で女たちが、並ばされとった。年寄りも中年も子供に至るまで真っ裸や。一人ずつ、なぶり者や。親の目の前でいたぶられて、殺される娘もおった。

芳雄 ……。

田中 生きたまま、火つけられて黒焦げになった子供やじ

いさんも見た。

芳雄 むごいな。

田中 看護婦らしき人間もおった。あれはきつと他所者やな。村人とは明らかに違う格好で目立とった。五人も六人ものロスケに追いかけてまわされて、可哀想に。逃げきれんと思つたんやろう。走りやめたとたん、口から泡噴いてバタツ、それつきり。

芳雄 青酸カリ。

田中 ああ。

芳雄 可哀想に。

田中 わしらは一旦陣に戻った。そこに、若い母親が逃げ

てきて、

芳雄 一人か？

田中 いや。赤ん坊をおぶとった。男のわしでもキツイ急な坂や、上るのには相当難儀したと思う。他にも何人か追いかけて来とったんやが、我が陣は丘の上で待機。何の手えも貸さんかった。それどころか、「村人が来たら追い返せ」言うて。

芳雄 行き場のない人間を追い返した？ お前もか？

田中、応えない。

田中 女、子供でも、いざとなったらあんな声出せるんな。爆撃音。村のあちこちから立ち上る黒煙。響き渡る怒号と悲鳴。どすどすと鈍く響くソ連兵たちの靴音。連射されるマンドリン。村人たちの断末魔。火を放たれ、方々に散る人間。自らが火種になるとも知らんと、ただ逃げ、ただただ逃げて。逃げて、逃げて、力尽き、息絶える。そこから新たな火が立ち上り、辺り一面、瞬く間に火の海や。

田中、遠くに目をやり、

田中 燃え盛る炎を見て、ああ、あの紅は人間の血や、思った。拭っても、拭っても変な汗が吹き出してきよった。温い風にのって、何臭いんかわからん匂いが漂って。暑いはずなのに、ガタガタ震えてきて。あかん抑えなあかん、しっかりせんと、と思えば思うほどよけい震える。どうしてええかわからんようになって、汗なんか涙なんか、暑いんか恐いんかさえもわからんようになって。あんな時のわしは、得体のしれん何かに取り込まれてしても、何の抵抗もできんかった。

芳雄 くそつ、ソ連軍め。

田中、首を振る。

田中 ロスケだけとちやうやろ。強い、弱い、勝った、負けたで立場がひっくり返っただけと違うんか。ロスケの中にも気のええ奴はおるし、味方のはずの日本人にも悪い奴はおる。お前にも覚えがあるやろ。中国人や朝鮮人の悲鳴と、あの村人たちの悲鳴、どこにどう違いがある？

と、赤ん坊を抱いた女の姿が浮かび上がる。(以後、女) 衣服の一部は焦げ、腕や足に大きなやけどを負っている。

女 関東軍の皆さん。私はこの丘の向こうの村の者です。ソ連軍に襲われました。村を守るべき男衆はみな召集され、お国のために命を捧げ、戻ってきません。どうか、この状況をお含みいただき、今すぐ出立し、私どもを守りくださいませ。

軍服男 一同待機。

整列し、敬礼する兵士たち。

女、列の端から一人ずつ、兵士に駆け寄り、訴え続ける。

女 火を放たれ、村中が燃えています。怪我人もおります。どうか、私どもをお救いください。

軍服男 待機。

手を後ろに組み、無言のまま整列する兵士たち。

女、避けられても、避けられても追いつがる。

女 後生です。後生でございませ。この子、この子だけでも、お助けくださいませ。私はどうなってもかまいません。どうか、誰か、この子を。貴方様のご兄弟、ご子息とお思いいなつて。この哀れな幼子にお慈悲を。

田中 あのと。

田中、女に声を掛ける。  
その直後、軍服男にひっぱりだされ、ビンタされる。

田中 引き倒されて、その場でしこたま殴られた。

殴られる田中の横で女、兵士たちにぐるりと囲まれる。引きずられるようにして、どこかに連れていかれる。

田中 「この腑抜け。気合い入れろ」とか何とか。

田中、薄ら笑い。

田中 気合い入れて、気合い入れて、あの気の毒な村人たちを見殺しにつてか、ふざけんな。

芳雄 三吉。

田中 背負われた子はもう、あかんかった。それでも、被害が拡大することを恐れたんやろうな、軍は。

田中 ロスケどもが去るのを待ってあの村に戻った。綺麗な月の晩でなあ、青白く透明な光は冷たくて、美しくうて。その明かりの元で、あの看護婦仰向けのまま棄てられとった。

地べたに転がる、目を見開いた看護婦の亡骸。

芳雄 「生きて虜囚の辱めを受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ」か。(※1)

田中 目え開けたまんまでは成仏できん思つて、臉を抑えてみたけど、何度やっても見開いたまんまで、

田中、首をふる。

田中 あの晩以来、あの看護婦の顔が、目が、頭から離れんようになってしもた。

芳雄 ……。

田中 芳雄、どない思う？ 負傷兵の手当てをするために、わざわざ志願して満州まで。そんな尊い志が踏みじられたんやぞ。

芳雄 ああ。

田中 可哀想やと思わんか？

芳雄 ああ。

田中 近くにいながらわしは何にもしてやれんかった。

芳雄 判断したんは軍や。

田中 けど。

芳雄 お前はそれに従つたにすぎん。

田中 ふん。他人事か。

芳雄 そうやないが。  
田中 もし、家族や友人らが同じ目に遭ったら？ それで  
もお前は、同じことが言えるんか？

芳雄、黙る。  
田中、力なく笑い、

田中 ああ、いてもたってもおられん気持ちや。どう足掻  
いてもこんな身体ではもう、誰一人として守れはせん  
の。

すすり泣く、田中。

芳雄 泣くな、三吉。病気治して、体力つけたらまた。

田中、聞いている。

田中 無念や、このまま死んでしまうのが。

芳雄、声を荒げる。

芳雄 いらんことばかり考えるな。

田中 いらんこと？

芳雄 死ぬ、なんて言葉絶対に使うな。

田中 治まらんのや。

芳雄 治まらんのはわしも一緒や。

田中、唇を噛みしめる。

芳雄 な、三吉。  
田中 すまん。

芳雄、思いついた。

芳雄 そや、お前、何か欲しいもんないか？ したいこと

でもない。何かないか？

田中 白飯。

芳雄 おお、白飯か。ええな、他は？

田中 月。

芳雄 月？

田中 ああ、青白く冷たく見える月やのうて、でっかくて

まん丸の黄色いお月さん、あれ見たいなあ。

芳雄 よし。帰ったら、腹一杯お前に白飯を食わせてやる。

いや、まずは祝杯からや。月を肴に一献、差しつ差され  
つやろうやないか。

田中、芳雄を見つめる。

田中 おおきに。

芳雄 なんや、礼言うなら叶ってからにせい。

間。

田中 芳雄。

芳雄 え。

田中 頼むな。

芳雄 頼むって、何をや？

田中 さあ、何やるな。

芳雄 しつかりせえ、三吉。自分の望みくらい、

芳雄、にやりと笑い、

芳雄 そや、惚れた女に、恋文でもどや？ 字下手なお前

になりかわり、いくらでも代筆したるぞ。

田中 あほ、ぬかせ。

田中、少し笑う。

芳雄 そやそや三吉、その顔。

田中 ふん。お前とおったら力抜ける。疲れた。わしはも

う寝る。寝もって、ぼちぼち考える。

田中、芳雄に背を向け、目をつむる。

芳雄 なんや、照れとんのか？

田中、小声で、

田中 お前こそ、あの娘に、言いたいことも言えんくせに。

芳雄 は、何て？

田中 何も。

芳雄、笑顔で、

芳雄 じゃ、行くわ。

田中 ああ。

芳雄 ほな、明日。

田中 ああ、ほなな。

芳雄、去る。

暗転。

(一〇)

溶明。

(字幕) 二〇一五年一月一日。加藤家。正午。室温24度。

芳雄、いつものようにパソコン作業。

ラジオニュースが流れている。

ラジオ 一〇月一〇日土曜日、お昼のニュースの時間です。歴史的価値の高い文書や絵画などを対象にしたユネスコ(国連教育科学文化機関)の「世界記憶遺産」の新規登録が発表され、日本から「東寺百合文書(とうじひやくごうもんじょ)」と「舞鶴への生環—1945~1956シベリア抑留等日本人の本国への引き揚げの記録—」が登録されることになりました。

芳雄、入力の手を止める。

芳雄 そうかあ。

芳雄、ラジオを切る。続いて、パソコンを操作し、お気に入りのロシア民謡をかける。

曲が始まると同時に、舞台中央に勢いよく飛び出して来るカーチャ。

大勢の兵士が見守るなか、音楽隊のアコーディオンの音に合わせて舞い踊る。

カメラを構えるロシア兵。

何度も光るフラッシュ。

祝福の手拍子、足拍子。

曲が終わる。

カーチャ、スカートの裾を持ち上げ、お辞儀して見せる。

カーチャ アシノケガナオリマシタ。ミナサン、ヨクシテクダサツテ、ドウモアリガトウ。ココロカラカンシャシテマス。

「カーチャ」コール。

芳雄、カーチャの姿が消えてしまうまで、じつとその姿を追い続ける。

と、一本の電話。芳雄、電話に出る。電話の主は北川先生。

北川 もしもし。加藤さん？

芳雄 はい。そうです。お宅、どちらさん？

北川 北山大学の北川です。

芳雄 ああ、先生。ち、ちよつと待ってもらえますか？

芳雄、慌てて音楽のボリュームを下げる。

芳雄 お待たせしました。

北川 大丈夫ですか？ TV、ご覧になりました？ 登録。

「シベリア抑留」がユネスコの世界記憶遺産に。

芳雄 決まったようですね。先生もほつとされたでしょう。

北川 ええ、まあ。私というより亡き祖父のね、悲願でしたから。

芳雄 いやあ、良かった。ほんま良かった。先生、今日はそのことでお電話を？

北川 いやあ、この間の取材の続きを願いできかないかと思いましてね。お時間あれば、そのお。

芳雄 続き？ はいはい。いいですよ、今からでも。

北川 ありがとうございます。助かります。では、早速。収容所一年目の話から。菊池さんが連行された話をですね。詳しくお願いします。

芳雄 菊池さんね。あの人は、私と同郷やった田中三吉い

う人間を庇って、連れて行かれたんですわ。

北川 田中さんという方を庇われた？

芳雄 ええ。銃を突きつけたのは、ロシア人監視兵でして、

三吉の時計を気に入って、よこせ言うて、脅したんです。発砲した瞬間、菊池さんが止めに入ったんですが、その行動がねえ。銃を奪おうとしたと勘違いされて。殺されはせんかったけど、菊池さん、別の収容所に送られてしもて。

北川 発砲を食い止めるために揉みあい？ そりやまた、命がけですなあ。

芳雄 ええ。あの人はほんまに、正義感の強い、頼りがいのあるお人でした。私の命の恩人でもあります。

北川 恩人？

芳雄 収容所に入ってすぐの頃、演達の途中で居眠りをはじめた兵士がいたんです。見つかったら上官に殴られるやろ思つて、親切心で上着の裾を引っ張ったところ、振り返つたその人は疋田いう兵長で。生気だと思われたんでしようなあ、それから、あからさまないじめを受けるようになりまして。

北川 軍隊内でのいじめ。聞いたことがあります。そういうことは、よくあったんですか？

芳雄 私ら、二〇歳にもなつてないペーペーですからね。古年兵たちは何かというと厳しかったですよ。真夜中に急に起こされて、寝ぼけてふらついたりますと、「たるんだる」言うてビンタされたりね。立場の弱いもんをいたぶつて、ストレス発散してたんでしようなあ。

北川 他には？ 辛い記憶を思い出させるのは申し訳ないですが、覚えておられるエピソードがあれば、教えてくださいませんか。

芳雄 辛い記憶。

芳雄、しばし沈黙。

\*

疋田がいる。

疋田 あの女とデキておるのか？

芳雄 女？ ここには女などおりませんが。とぼけるな。貴様、月に何度かバザールに行く度、

あの女と、逢引きしておるのだろう。

芳雄 少尉殿の命で、買い物。

疋田 ふん。都合の良い言い訳をしよつて。

芳雄 言い訳ではありません。カーチャの家は、村一番の店です。そこで食材や、マホルカ（煙草）を。

疋田 なるほど。そういうことか。

芳雄 ……

疋田 加藤。次の外出の際には、俺も同行させろ。

芳雄 兵長殿。お言葉ですが、私の一存では、何とも。

疋田 そうか。お前は、物分りのいい奴だ。

芳雄 兵長殿。

疋田、回り込んで無理やり芳雄と肩を組む。

疋田 少尉殿にはわしから話す、あの女と家族を助けたいなら黙つてわしの言うことに従え、いいな。

疋田、去る。

\*

北川 収容所生活も最初の方は、軍のヒエラルキーが残っていたと聞きますが。

芳雄、話の意図を掴み損ねる。

芳雄 えっ、ヒエハルさん？ そんな知り合いはおりませんが。

北川、笑う。

北川 いえいえ。収容所に入れられて、組織は崩壊してもですね、しばらくは階級が続いていたと。

芳雄 はあ、そうです。そういうことです。一年目は完全にそうでした。徐々に変わってきて、「〇〇さん」いうて目上の人に対してもさんづけで呼ぶようになってきましたけど。えーっと。なんや話がズレてきましたな。

北川 失礼しました。あらためて、兵長から受けたいじめについてお聞かせいただけますか？

芳雄 しょうもないことで怒られて、殴られたり、蹴られたりは当たり前でした。雪の日に屋外に放り出されて、死にかけたりもしました。

北川 死にかけた？ そこまで酷いじめを？

芳雄 はい。菊池さんと三吉が探しに来てくれなんだから、どうなっていたか。そやのに、菊池さんとはあれっさり。別の収容所に行かれてからの消息は分かんずじまい。

生きておられるのか、亡くなっておられるのかさえも、北川 正田という人は、その後。  
芳雄 死んだそうです。

\*

汽笛が鳴る。  
帰還船上にて、下級兵たちに取り囲まれる正田。

正田 誤解だ。わしはただ軍の命に忠実だっただけだ。悪いのは戦争であり、わしはその犠牲者に過ぎん。満州にあった広大な土地、妻や幼い子供たち。そのすべてを戦火で失った。傷ついたのはわしも同じ、お前たちと何ら変わりはない。さあ、同胞たちよ、共に帰還しようではないか……た、頼む。命だけは、命だけはどうか、金ならやる。頼む、頼むからわしを、誰か、誰かー。

正田、下級兵たちに捕まり、担ぎあげられる。  
「あー」という叫び声と共に、海中へと沈む。

北川 正田さんについて、何か思われることはありますか？

芳雄 ラーゲリにいた頃は、正直言うて、殺してやりたいほど憎かったですが、

芳雄、首をふる。

芳雄 個人的な恨みを増幅させたところでしゃあないやな

いかというのが今の心境です。憎むべきは敵国やない、  
疋田でもない。あるべき理性を内側から剥ぎ取ってしま  
う「戦争」そのものやないかと。

考え込む、芳雄。

北川 あの、いいですか？

芳雄 え、ああ。

北川 話を戻してすみません、田中さんを脅したという口  
シア兵はどういうわけで銃を？

芳雄 後で知った話ですが、最初の収容所におった監視兵  
らはロシアの罪人だったようです。若くて、見るからに  
チンピラのような奴らでした。他の班の監視兵と戦利品  
を競っておったようです。

北川 戦利品ねえ。

芳雄 言うことときかん奴にはマンドリンちゆう名前の自動  
小銃を突きつけるんです。発砲もしますが、それは脅し  
で、実際には撃つことはありません。そんなことしたら  
奴らも罰せられますから。

北川 わかつていながら、言いなりというのは、悔しかつ  
たでしょうね。

芳雄 そりゃあ、悔しかったですよ。でも、負けた身です  
から、我々は。逆らうことなどできませなんだ。でも、  
菊池さんだけは違いましたなあ。あの人はほんまに、勇  
気あるお人でした。

と、玄関チャイムの音。玄関前に橘。

芳雄 先生、ちよつとすみません。

芳雄、受話器を下し、玄関方向に向かって、

芳雄 はい、今行きます。ち、ちよつと待って。

芳雄、再び受話器を耳にあてる。

芳雄 先生。

北川 どなたかお見えになったのですね。だったら私は。  
続きは今度。また、お電話させていただきます。

芳雄 すんませんなあ。

北川 それでは、  
芳雄 失礼します。

芳雄、受話器を置き、再び玄関側に声を掛ける。

芳雄 どちら様？

橘 橘です。

芳雄 ああ、橘さんですかいな。

橘 すみません、突然。

芳雄 ええけど。降りていけなので、合鍵使って入って下  
さい。

橘 わかりました。

橘、自分で鍵を開け、中に入る。

橘 こんにちは。

芳雄 こんにちは。えーっと、今日は。

橘 そうです。違います。

芳雄 違う？ 勘違い。私の。

橘 いえ。

芳雄 え。

橘 プライベートで、ちよつと。

芳雄 ああ、そういう意味。

橘 仕事中だと、あれなんで。

芳雄 とりあえず、あがつてください。

橘 ありがとうございます。

芳雄 適当に座ってくれたらいいから。そうや、お茶。

橘 おかまいなく。

橘、座る。戸惑う様子の芳雄を見て。

橘 大丈夫ですから、本当に。

芳雄 そうですか。

芳雄、その場に留まる。

橘 話し声が。

芳雄 先生と電話してましてな。

橘 先生って、ロシアの？

芳雄 いや、キタ先生から。

橘 キタ先生って。

橘、少し笑う。

橘 北山大学の北川先生、でしょ。

芳雄 ややこしいでつしやる、何か。

橘 だからって。そんな略し方。

橘、もう一度笑う。

芳雄 来年の企画展で発表したいから話聞かせて欲しい、

って、キタ先生から一昨日電話があつて、今日はその続

きですわ。

橘 終わったんですか？

芳雄 いや、また後で。

橘 すみません。

芳雄 いやいや。気にせんと。ところで、今日は？

橘 芳雄さんのご意見を伺いたくて。

芳雄 意見？

橘 私、お役に立ててますか？

芳雄 はい、良くしてもらってます。

橘 ほんまに？

芳雄 そりや、もう。

橘 氣い遣わないでくださいね。

芳雄 え。

橘 あるんでしょう、不満な点とか、もつとこうして欲し

いと、か、

芳雄 参ったな。

橘 やつぱり。ご不満なんですな。

芳雄 どないしたんです？

橘 私、こんなんでしょう。だから。

芳雄 こんなんで？

橘 昨日、事業所の面談があつて。所長から指摘されたんです。橘さんは真面目すぎつて。正論かもしれんけど、硬い口調のせいで誤解されやすい。融通がきかんとくも直した方がいい。ヘルパーとして、相手の気持ちを察して動くよう心がけてください、つて。

芳雄 面談つて。そんなキツイこと言われるんですか。真面目の何があかんのです？ 一生懸命やつてそんなこと言われたんでは、気持ちが塞いでしまうわ。

橘、溜息。

橘 いいんです。そこは。さほど堪えてませんから。

芳雄 橘さんがええなら、ええですけど。何の話か、私にはさっぱり。

橘 言いづらいですよ。やつぱり。私が何でも真面目に取り過ぎるから。

芳雄 だから、何でそう、悪う、悪う、

橘 ほんまのことやから。

芳雄 こちらも、ほんまのこと言うてるんですが。

橘 嘘。

芳雄 何で私が、嘘つかなあかんのです？

橘 言うてくれはらへんから。

芳雄 何を？

橘 抑留者の会のこと。

芳雄 え。

橘 駄目ですか、私では？

芳雄 駄目も何も。

橘 手間掛かるやないですか。聞き取りとか。

芳雄 はあ。

橘 読み上げたり、入力したり、資料整理したり。場合によつては取材とかも。一人では何かと大変でしょ。

芳雄 まあ。足の調子が悪うなつてからは、大変なことも増えてきましたわな。

橘 手伝う人間が必要では？

芳雄 はい？

橘 できれば助手を、私が、お願いします。

芳雄、混乱。

芳雄 私が？ 助手？

橘 いえいえ。芳雄さんは代表。私が助手。

芳雄 ええつ？

芳雄、申し訳なさそうに。

芳雄 考えたことなかつたですわあ。

橘、いじけた様子で。

橘 そんなに私、頼りないですか。

芳雄 いやあ、急な話で。

橘 思いつきやないですよ。ヘルパーとして芳雄さんに付かせてもらつて半年。前から色々考えてて。もうそろそろ切りだしてもいいかなつて。

芳雄 いやいやいや。

橘 本気です、私。芳雄さんのこと尊敬してますし。

芳雄 参りましたなあ。

橘 こんなことぐらいで、参らんといてくださいよ。

芳雄 俊にも手伝わせたことないのに。

橘 え。

芳雄 若い者には荷が重過ぎるでしょ。俊には、「わしに遠慮せず、自由に生きろ」、言うてます。私かて、終戦後五〇年経って、ようやく立ち上げたくらいで。一代限りのつもりでした。誰かに引き継ぐなんて考えたこともない。

橘 終戦後五〇年経ってから。

芳雄 はい。

橘 どうして？

芳雄 生きるのに必死で。それどころやなかったですから。

\*

息子夫婦の遺体を前に泣き崩れる妻俊子。

俊子 なんで？ ねえ、なんで。なんであの子らが、私より先に。

芳雄 泣くな、俊子。事故に巻き込まれたんは、あいつらの定めや。わしらは、俊のこれからのことだけ考えていかんと。

\*

芳雄 忘れたかった、っていうのもあります。

橘 忘れる？

芳雄 ええ、何もかも。

橘 ……。

芳雄、またもや記憶の断片。

\*

カーチャがいる。

背を向けたまま立っている。

震える肩。

芳雄、駆け寄りたい気持ちを抑え距離をとる。

芳雄 すまない、カーチャ。

カーチャ ダモイ（帰国）ヨカッタ。デモ、ワタシイケナイ。コノムラハナレル、ダメ。デモ、アナタニハアナタノムラガアル。ワタシタチハダイジョブ。ココロハ、イツモイツシヨ。ヨシオ、アイシテイマス。オゲンキデ、サヨウナラ。

振り返り、芳雄を見つめる妊婦姿のカーチャ。

\*

芳雄 シベリアのあれは、ほんまに辛い経験でした。

橘 でも、その辛い記憶と再び向き合い、一人で会を立ち上げられた。

芳雄 そうです。

橘 きっかけとか、あるんですか？



わった人みんな、それぞれに思うことが……。その思いを踏みにじるのが戦争でつしやる、だからこそ、あいつらのことを憶えておいてやりたいんです。一つでも、二つでも……。私に出来ることというたら、それくらいですから。ね、そうやないですか、橘さん。

橘、深く頷き、

橘 はい。

芳雄 と、思つて立ち上げた会なんやが、

芳雄、深いため息。

芳雄 さて、この身体でいつまで続けられるか。

橘、立ち上がる。芳雄の手を取り、

橘 芳雄さん、続けましょうよ。抑留者の会。出来る限り。

芳雄 ああ、まあ。

橘 私、お手伝いします。俊さんにも手伝つてもらつて。

三人でやれば、長く続けていけますよ。あと、ターニヤさんとか。北川先生とか、学生さんとかにも声掛けて、協力してもらいましょう。ね、芳雄さん。

芳雄と橘、今後について話を続ける。

俊、帰宅。話し込む三人の姿。

(一一)

(字幕)二〇一五年一月一日。加藤家。一四時。気温15度。

ターニヤの到着を待ちながら、抑留者の会の作業をしている芳雄と橘。  
ラジオが流れている。

ラジオ 二〇一五年一月一日。日本人宇宙飛行士の油井亀美也(ゆいきみや)さん、四五歳が乗り込んだロシアの宇宙船「ソユーズ」が日本時間の午後一〇時一二分頃、中央アジア・カザフスタンの平原に着陸し、国際宇宙ステーションから無事、地球に帰還しました。

芳雄 カザフスタンかあ。

橘 え。

芳雄、窓越しに空を見上げる。

芳雄 宇宙からの帰還かあ。えらいまあ、遠いところから。

外に向かつて、手を振る芳雄。

北川先生とターニヤ。加藤家の玄関前に到着。  
ターニヤ、芳雄をハグする。

ターニヤ ハジメマシテ、ヨシオサン。ターニヤデス。オアイデキテコウエイデス。ハジメテナノニ、アナタノカオ、トテモトテモナツカシイデス。

(一一)

(字幕)二〇一七年八月二三日。「シベリア抑留研究会」企画展会場。室温28度。

芳雄、スーツ姿で車椅子に乗っている。傍らには、いつものように橘。その隣には、俊も座っている。

北川先生、ターニャ、にこやかに笑う支援者たち。

芳雄、ゆっくりと登壇。会場を見渡す。

ターニャ、突然駆け寄って芳雄にハグする。どっと歓声。

照明が落ちる。

芳雄を照らすスポットライト。

田中、菊池、兵士たち、赤ん坊を抱いた女、看護婦らの影が浮かんでいる。

爆発音。

兵士たちの靴音。

ラジオから流れる「玉音放送」。

吹雪。硬い路面を叩く、ツルハシの音。闇の奥から光が漏れる。

菊池  
加藤

田中 芳雄。  
カーチャ ヨシオ。

懐かしい人々の声が聞こえる。  
芳雄、一礼。胸をはり、

芳雄 皆さん、こんにちは。「抑留者の会」代表、加藤芳雄でございます。今日は、皆さんに私が経験した抑留体験についてお伝えしたいと思います。召集されたのは一九歳の時でした。シベリアで生き長らえ、日本に帰還し、今も元気にやっております。お蔭様で、今年九〇歳になりました。ありがとうございます。戦争とは何か、あのシベリアの地で何が起きたのか。命が続く限り考え、語り続けていきたいと思っております。

立ち上がり拍手する支援者たち。響き渡る声援。  
芳雄、笑顔を浮かべ、

芳雄 まあまあ。皆さんどうぞお座り下さい。長い話になりそうです。ぼちぼちといきますんで、どうぞよろしゅうお頼み申し上げます。

(終わり)

※「生きて虜囚（りよしゆう）の辱めを受けず、死して罪  
渦の汚名を残すこと勿（なか）れ」

「戦時訓」東条英機一九四一年一月より

取材協力

元シベリア抑留者今村喜佐夫氏にご協力いただき、ラーゲ  
リ（捕虜収容所）生活について貴重なお話を伺いました。

参考図書・映画（敬称略）

映画『帰還証言…ラーゲリから帰ったオールドボーイたち

その2前編』企画・撮影・編集・いしとびたま

富田武『シベリア抑留者たちの戦後 冷戦下の世論と運動

1945～56年』人文書院

西尾康人『凍土の詩 シベリア抑留八年―爪で書いた記録』  
早稲田出版

西井安治郎『シベリアの冬を越えて』私家版

堀江則雄『シベリア抑留』東洋書店

松下隆司『蟻の如くに歩みたり記―元憲兵のシベリア抑留  
記―』私家版

山下静夫『画文集 シベリア抑留1450日 記憶のフィ  
ルムを再現する』東京堂出版